

**\* 国立天文台の歴史的アーカイブスに関するシンポジウムが開催された**

アーカイブ室新聞 254号(2009年12月9日発行)に「国立天文台の歴史的アーカイブスに関するシンポジウムプログラム」を掲載した。このアーカイブスシンポジウムは2009年12月11日～12日の2日間、国立天文台すばる解析研究棟大セミナー室で開催された。計画時には、参加者はあまり多くないこじんまりしたシンポジウムになるだろうと思っていた。ところが参加者を募ってみると締め切り時に講演申し込みが21件、参加者が50人を越えていた。計画では小さな20人程度の参加と思い、輪講室を予約しようとした。それでも30人は超えるかとも思い講義室を予約しようとしたが、あいにくそのくらいの輪講室も講義室も、そしてコスモス会館会議室もすでに予約が入っており、空いていたのが大セミナー室のみであった。そこで大きなセミナー室の真ん中でこじんまりとやろうと思っていたら、結局は参加者80人近い人数になり、大セミナー室以外では収容しきれない大盛況であった。参加された皆さん、講演してくださった方々に厚くお礼を申し上げる。

参加者は、遠くは山口県、愛媛県、三重県、宮城県などからの参加者もあり、基本的には30分講演でお願いした。初日の講演終了後には懇親会をもったが、これにも30人以上が参加され、非常に盛り上がった。写真1が会場風景である。



写真1 シンポジウム会場風景-1



写真2 シンポジウム会場風景-2

初日はひどい雨の降る寒い日であったが、悪天候にも拘らず参加され、懇親会にも参加していただき世話人としては大変ありがたく思った。懇親会では乾杯の音頭を元日本天文

学会理事長で仙台市天文台長の土佐 誠氏をお願いした。写真 3 は懇親会の様子で土佐氏の音頭で乾杯するところである。



写真 3 懇親会で乾杯の様子



写真 4 歓談の様子



写真 5 懇親会最後の締め

講演は、多岐にわたり古代中国の月食記録に基づいた研究、歴史的記録を用いた天体の長期的変動の研究、博物館の天文に関する資料のアーカイブについて、一戸直蔵の資料の

顛末、明治 20 年の日本を横断した皆既日食の一般市民によるスケッチ、国立天文台の博物館に向けての活動、三角点「三鷹村」設置の経緯など広い活動報告があり非常に興味深いシンポジウムになった。ぜひ再度このようなシンポジウムを企画するようにと声が上っていた。初日は雨で記念写真が撮れず、2 日目、昼食後、見学会の前に 65cm 望遠鏡ドームの階段で撮影した記念写真が写真 6 である。



写真 6 65cm 望遠鏡ドーム階段での記念写真

初日のみの参加者もいたり、この記念写真に参加されていない人は可能な限り加えたいと思っている。記念撮影の後、アーカイブ室発足で国立天文台から散逸した貴重な観測器械を収蔵したり、国立天文台に残っていた貴重な機器類を集めた国立天文台の天文機器資

料館（自動光電子午環観測室）、1903年フランス製のゴーチェ子午環、1880年ドイツ製の  
レプソルド子午儀を中心とした子午儀資料館を見る見学会を行った。

会場には、天文機器資料館の収蔵品のサンプルとして30mm天文経緯儀、27cm一等経緯儀、  
国産最古のシュミット望遠鏡が展示された。

以下の写真は見学会の一コマである。



写真6 後ろの方に搬入展示されたPZTが見える



写真7 太陽塔望遠鏡の分光器のカメラレンズの説明をする筆者